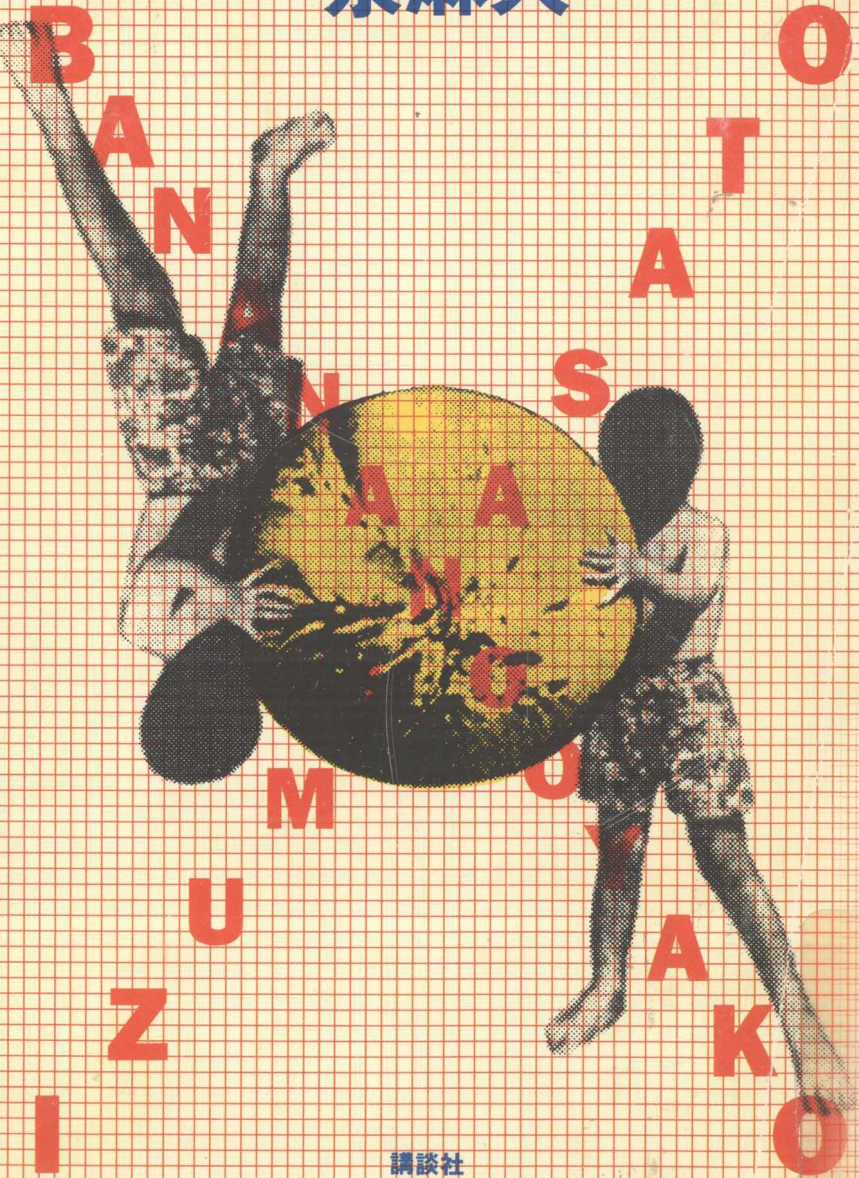
バナナの親子

泉麻人

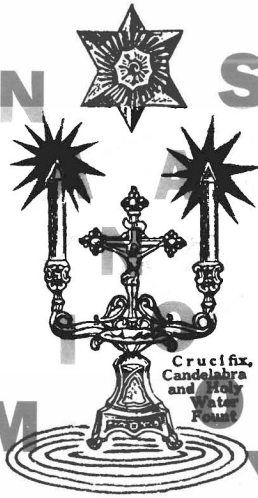


講談社

バナナの親子

泉麻人

BANANA NO OYAKO



IZUMI MASATO

講談社

日本音楽著作権協会（出）許諾第9250910－201号
TOM PILLIBI「トム・ピリビ」作詞：Pierre COUR
© Copyright 1960 by WARNER CHAPPELL MUSIC FRANCE, Paris
Rights for Japan assigned to SUISEISHA Music Publishers, Tokyo.

バナナの親子
1993年3月10日　第1刷発行

著　者　泉　麻人
発行者　野間佐和子
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二－一二－二一／郵便番号一一二－〇一
電　話　編集部（〇三）五三九五－三五〇五
販売部（〇三）五三九五－三六二二
製作部（〇三）五三九五－三六一五
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　株式会社若林製本工場
定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。
© Asato Izumi 1993 Printed in Japan

ISBN4-06-206215-1　（文2）

バナナの親子——目次

ノドのイガイガ——7
ネブライザー——27
サンタクロースの夜——46
迷路の街で——67
バレンタインの虐殺——86
泥とムチ——106

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

胃カメラマニアの男――124
ザリガニとアスパラガス――144
雨の日はサウナに誘って――164
軽井沢の密会――183
ハイジ救出作戦――205
愉しき2×4（ツーバイフォー）――228

装幀　伊藤桂司
海月まゆみ＋ロプロプデザイン

バナナの親子

『IN☆POCKET』'91年10月号から'92年9月号に連載

ノドのイガイガ

三周目に入る頃から俄(にわ)かに汗が噴き出し、身体がぐんと軽くなった気がした。いつも、三周目だ。皮下に溜った脂(あぶら)がボッと燃焼し、脇腹のあたりに醜くこびり付いたぜい肉がドロドロに溶けて毛穴から流れ出していく、そんな快感に酔いはじめる。

天神山自然公園は、かつての雑木林の形状を残しつつ四阿(あずまや)風の休憩所とベンチなどを所々に配したという、近頃このあたりのニュータウンで流行(はや)りのスタイルの公園であった。クヌギやコナラの林のなかに、緩い勾配のある小径(こみち)が周を描いている。一周すると四百メートル程、だろうか。このコースを五周して、公園入口の水飲み場の傍の砂地で、腕立て伏せを二十回、腹筋を二十回、ヒンズースクワットと呼ばれる足の屈伸運動を二十回、というのが〝基本メニュー〟だ。

思ったより、続いている。三十三、の誕生日の翌日からだから、もう二年になる。

「ちょっと太りましたぁ？」

数ヵ月ぶりに会う知人たちに、そうたて続けに言われたのが、きっかけと言えばきっかけなのだが、娘の麻依（まい）の通う幼稚園がこの天神山自然公園に隣接していなければ、こういうことにはならなかったであろう。

四歳になる娘の麻依を、毎朝、自転車にのせて「せせらぎ幼稚園」に送り届けるのが、僕の日課になっている。「せせらぎ幼稚園」というのは、略称で、正確に言うと「あざみケ丘クヌギの里せせらぎ幼稚園」ということになる。僕はこの、いかにも〝緑豊かな自然のなかでスクスクと幼児を〟的なニュータウンの分譲住宅のチラシのコピーみたいな幼稚園の名称が好きになれなかった。

現にこの街にはもはや、さほど豊かな緑などない。天神山の一角を残して、あたりはツーバイフォーとかメゾネットとかリーベルハウスとかの活字を連想するような、住宅群に埋めつくされようとしている。

娘の毎朝の送りは、初めのうちは苦痛だったのだが、慣れるうちに愉しくなってきた。平日、娘と二人きりでコミュニケーションがとれる唯一の時間、ということもあるのだが、それ以上に、どうも自転車に乗ったりすること自体が案外愉しいのだ。

小学生の頃の、24インチのミヤタ自転車のタイヤの軸の隙き間にゴムボールをはさみこんで原っぱに繰り出していった頃の自分に、一瞬トリップできる。

僕はバスが大好きで、家の近所の自転車コースに、自分なりに停留所を所々設けて〝ひとり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

バスごっこ〟をしていた記憶がある。たとえば、御影石の立派な門柱に「岩崎」という表札を掲げた家の前が「岩崎町」という停留所で、その先の伊勢元という酒屋のある十字路が「伊勢元銀座」になったりする。そういった停留所名を、バスの運転手特有の語尾が曖昧な沈んだ発声で「えー、伊勢元銀座ぁ〜っす」と、口のなかでアナウンスしつつ〝自転車バス〟を走らせていくのだ。

東京の目黒から多摩川を越えてこのニュータウンに越してきて五年になるのだが、自転車に乗りながらこの新しい街の地図に、自分なりのバス路線図を描いていく作業が愉しい。

いつものメニューをこなして、水飲み場の蛇口の水で顔や首筋に滲み出した汗と脂を洗い流す。十月の朝の爽やかな冷気が、火照った体温を一気に冷却していく。

ベンチに腰を掛け、汗の滲んだTシャツの肩先を鼻に近づけて、匂いを嗅いだ。ツンと仄かに昨夜のアルコールの退廃的な匂いがした。そして、思い出したように僕は唾をゴクン、と飲みこんだ。

何かが、つっかえたような不快な感じがする。ここ一ヵ月ばかり、そういう嫌な感覚がノドに溜っていた。考えれば考えるほど、そのノドの不快感は重くなっていく。首筋を押さえると、つっかえた感じのする声帯の脇のリンパ腺のあたりが腫れているような。

「声、嗄れたんじゃない？」

「唄い過ぎじゃないの」（笑）

昨夜のカラオケ屋での富田たちの雑談が耳の底にこびりついていた。

大学時代の友人たちとの呑み会があった。だいたい僕らは昔から学生時代の友人同士寄り合う機会が多かったのだが、三十を過ぎる頃からとりわけ頻繁になった。

昨夜は、丸の内の大手商社に勤める富田が新人のOL三名を調達してくる、ということで、僕はノドの不快感をひととき忘れてウキウキと会場に繰り出していったわけだ。呑み会にはもう一人、テレビ局に勤める権藤が「いやー、本番オシちゃってぇ」と軽薄な調子で言い訳しながら遅れてやってきた。つまり、三対三の〝合コン〟というやつである。

しかし、なかで妻帯者は僕一人、そういう意味では不利だ。僕は、中堅クラスの広告代理店を三年ほど前に退社、独立して広告プランニング会社を開いている。会社と言っても同年代の相棒と、電話番の女の子と三人でマンションの一室を借りてやっているようなところなので、彼ら大手組織社会の人間から見れば、ちゃらんぽらんな自由業の奴、ってのに見えるらしい。そういうちゃらんぽらんな自由業者ってのは、家庭を持っても気軽にノコノコとこういう場にやってくる、というイメージがあるようで、同窓生で堅い銀行などに勤めた妻子持ちよりも、この手の催しにお声が掛かる機会が多い。

二次会で流れた中目黒のカラオケバーで、初めのうちは女の子たちに合わせて、うろ憶えのいまどきの唄を覚束(おぼつか)ない口調で唄っていたのだが、終盤ではいつもの通り、〝懐しのあの唄メドレー〟の世界に突入した。

僕ら、オジサンというものに成りかけた世代のパターンは決まっている。前半は、二十三、四の娘たちに合わせて、いまどきのディスコやらフジテレビの十時台のドラマがどうしたこう

したの話（僕や権藤の職種はその手の会話においては有利だった。権藤は自分の番組で会ったタレントの、ありもしないようなウラ話を持ち出して主導権を握っていた）をしているのだが、酔いが廻るうちに、若い奴らとの一線を引きたくなってくる。つまり、オジサンの側に身を移して、彼女たちの周辺にいるであろう二十代の、Ｌｅｖｉ'ｓのジーンズを履いても欧米人に見劣りしないスタイリングをした若い男たちとの差別化を図りたくなってくる。

「そうか、昭和43年って言ったら、ひと回り違うのか……」

「サル？」

「東京オリンピック、知らねえよなぁ」

概ね、東京オリンピックと、ひと回り違う干支の話から〝オジサンたちの夕べ〟のコーナーに突入していく。

そして、当然、カラオケはＧＳメドレー、ちなみにＧＳはガソリンスタンドではない。グループ・サウンズだ。

♬チャララ　ラッチャ　チャラチャ〜ン

「ブルーシャトウ」（ブルーコメッツ）の懐しいイントロで始まり、「長い髪の少女」（ゴールデンカップス）「夕陽が泣いている」（スパイダース）「バラ色の雲」（ヴィレッジシンガーズ）「スワンの涙」（オックス）、というあたりがバンバンとワンコーラスずつメドレーで続き、定番「想い出の渚」（ワイルドワンズ）がきて「ブルーシャトウ」の後サビで締めくくるといった構成。

ステージで狂乱するひと回り上のオジサンたちの姿を、商社の名刺を渡されなければ六本木のミニクラブのホステスと言われても納得するような風体をした娘たちは、やはり六本木のミニクラブのホステスよろしく慣れた感じで、とりあえず一応気のない合いの手を入れながら見守っていた。

「声、嗄れたんじゃない？」

「唄い過ぎじゃないの」

「カラオケ・ポリープってやつか」

「喉頭ガン、だったりして」

僕のパートであるオックスの「スワンの涙」のサビ、♬いぃつぅかぁ　キミぃがぁ〜　の声が非道く嗄れてハスキーになった。尤も、オックスのボーカル、真木ひでと（野口ヒデト・当時）の声は嗄れ気味のハスキー・ボイスで、それはそれで真に迫っていたわけだが、声質の異変の指摘に、僕は少なからずショックを受けた。

〔喉頭ガン〕

喉頭部のガンの約70パーセントは声帯部に初発し、その初期症状としては声の嗄れ、あるいは発声時に息苦しさを伴うこともある。また声門上部、下咽頭に初発したガンの場合、つばなどを飲みこむ際にものがつかえているような異物感を覚えることが多い。

ここ一ヵ月ばかり、脳裡にそんな医学書の文脈がこびり付いていた。

僕は幼くして〝病気恐怖症〟のようなところがあった。小学校の一、二年の頃だ。テレビで「愛と死をみつめて」というドラマをやっていた。若くして悪性腫瘍に冒された娘とその恋人との〝愛の闘病記〟というやつだが、僕はそのドラマを観ていて恐怖感を覚えた。

「ガン、より悪性です」

「より」の箇所にアクセントを付けて、医師が主人公の娘の親だかに宣告するシーンがあった。お腹が痛くなったり、頭が痛くなって医者を訪ねるとき、いつもそんなシーンを一瞬、思い浮かべるようになった。

五年生から六年生の頃、鎖骨のあたりに手を触れていて、小さなアズキ大のシコリがあるのに気づいた。

「骨肉腫だ！」

当時、その難病を用いた青春ドラマが流行っていたのだ。気にしだすと、いても立ってもいられなくなる。かと言って、医者の門を叩くのは気がひける。仮に、重病の診断を下されたら……。と、思い悩んでいるうちに、グリグリのある鎖骨側の肩のあたりが、何となく重ったるくなってきて、腋の下のリンパ腺が心もち腫れているような気がしてきて、さらに首筋のあたりに手を触れると、また新たな小さなグリグリが発生したような。

こういった諸症状は、たとえば足首を捻挫して本当に足がズキズキと疼(うず)くとき、あるいは風邪をひいてノドがヒリヒリと痛んでいるとき、などには現われない。つまり、本物の病気を患

っているときには忘れているのだ。
そして、風邪や捻挫が完治して健康体になると、どこかにまた原因不明の倦怠感やら、何となく痛いような感覚を覚えるようになり、そのあたりの軟骨や脂肪の瘤(かたま)りに手を触れては、ぞっと鳥肌を立てているのである。

僕は深いブルーの空を見上げながら、ランニングパンツのポケットにねじ入れてきたセイラムライトを一本銜(くわ)え、煙を深く吸いこんだ。公園事務所の傍の電線に小ぶりの秋のトンボが列をなしてとまり、蒼(あお)い空に描かれたそのシルエットが物哀しくも美しかった。
煙に燻(いぶ)されてノドはいっそういがらっぽくなった。異常感を覚えはじめてから酒量もタバコも増えたように思う。既(すんで)の事にクレヨンを塗り損じてしまった絵を、癇癪を起こしてグジャグジャに塗り潰してしまう幼児のような心境だ。痛めるだけ痛めつけて、異常感をタバコの吸い過ぎのせいにしたかった。
カッ、カッ、と空咳を数回吐き捨て、僕は自転車に股がった。
煙草をねじ入れていたランニングパンツのポケットの底には、しわくちゃになったメモ紙が一枚あった。

牛乳（奥中山高原牛乳の日付の新しいもの）
卵（ヨード卵か放し飼い）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c